

クレド「共に」について

私たち社会福祉法人愛光園で働く職員にとって、職業となる福祉・介護サービスは人が人に関わる関係の中でなされる仕事です。その仕事に臨むときの気持ちの整え方はとても重要です。私たちはその時の気持ちだけでなく姿勢として在り方の基本を「共に生きる」と短い言葉で表し伝えてきました。そしてまた「共に生きる」とはどんな意味があるのか「共に」という冊子クレドに集約してきました。このクレドは作成当時(2010年頃)に在職していた全職員が仕事を通じて感じた喜び・感謝・悲しみ・苦労などの泣いたり笑ったりのエピソードを出し合い、それらに共通する思いや考え方を文章化したものです。共に働く仲間として、このクレド「共に」を紐解き、そのなかにある言葉の意味を噛みしめ反芻することが仕事のうえでの道標となると思います。

今般、2011年5月に制定したクレド「共に」に＜倫理綱領＞を加え、＜よき支援者であるために＞と題していた部分は＜行動規範＞であることを明示しました。また＜倫理綱領＞には、「共に」の対象としての「誰もが」の「誰」とは、ご利用者・ご家族・職員など全ての人を指すことを明示しました。

次のページ以降に、このクレド「共に」の解説を載せます。

2022年6月
社会福祉法人愛光園
理事長 日高啓治

<表紙>



これは愛光園の事業所の1つ「ひかりのさとのぞみの家」のホールに飾っている額です。「まどか」にもあります。この言葉は、後藤静香という大正から昭和初期にかけて活躍した社会教育家の著作からとったものです。

「人の幸せとは何か」と考えた末、ここに行きついたとのこと。「祈りて」とは、神様仏様にお祈りするのではなく、「謙虚になって」だそうです。謙虚になって、一緒に食べ、働き、学び、考え、楽しむ。それが究極の幸せ。

福祉の現場では、どうしても介助する側される側という意識になりがちです。人を見る前に障がい目がいきがちです。そうではなく、まず同じ人間同士ということ大切にしています。

そこでクレドでも表紙にこの額の写真を載せています。謙虚になって、一緒にそれが愛光園のあり方であり最も大切にしていることです。ですからクレドの冊子のことを「共に」と名付けています。

<行動規範～良き支援者であるために～>

(囲み内がクレドの文章。枠外の文が解説)

1. 私は、社会福祉法人愛光園の職員であるという誇りを持ちます。クレドを「社会福祉法人愛光園の理念と日常の支援や活動、業務と結びつけ、自主的に考え行動する基準」として位置付け、常に携帯して支援のあり方を振り返ります。

職員としての自覚と誇りを常に持っているのはもちろんのこと、クレドを携帯し読み直し、自分の支援のあり方を問い直します。支援のあり方に迷ったりしたときには、理念と、理念を職員の行動規範としたクレドを基準とします。

2. 私は、相手を「よくみます」。よくみるということは相手をよく知るということです。どのような人か、これまでどのように生きてこられたのか、今どんな状況なのか、内面や背景までよく知ろうと努めます。

まず相手のことをよく知るということが基本です。現在の表面的な状態だけを見て判断するのではなく、その方の生活歴、家族や友達などの人間関係、その中で担ってきた役割、好きなこと得意なこと、嫌なこと苦手なこと、大切にしてきたことやこだわってきたことなどなど。これで全て分かったということはありません。ありませんが、少しでもその人のことを知ろうという姿勢を大切にします。

3. 私は、相手の話を「よくききます」。よくきくとは受け止めるということです。すぐに相手を否定したり批判したりするのではなく、相手の立場に立って、まずは「この人はこのような思いなのだ」とあるがままに受け容れます。

一言でいえば「受容」です。自分の価値観・感情はさしおいて、相手の思いをそのまま丸ごと受け止めるということです。支援者も人間です。いろいろな感情は湧きあがります。受容するということはとても難しいことです。しかしまずありのままに受け止めようとする努力をしましょう。表面的な言葉や態度にとらわれず、たとえば入所されている方が興奮されて「家に帰る」と訴えられた場合でも、「帰れるものなら帰れば」と突き放すのではなく、「帰ることができないのに、わがままを言ってはいけません」と否定するのではなく、「ここにいたくない」と訴えているつらい思いを受け止め、「帰りたいたいと思うほどつらいんですね」と共感的態度をとるようにしましょう。これは極端な例ですが、思いをよくきき受け止めていきましょう。

4. 私は、相手に「よくします」。よくするとは傍観者ではなく当事者になるということです。よくするためには力が必要です。そして積極的に行動します。

支援者は、支援にかかわったところから「支援者」という当事者です。自分にできることはないか、他によい方法はないか、よく考えます。そして自分の言動が相手に影響を与えます。行動に注意を払い、適切であったかかえりみましよう。自分に力がないばかりに、知らなかったばかりに、十分なことができず後悔することは 多々あります。支援を必要とする人を悲しませないために、自分自身が悔しい思いをしないためにも、力を付けたいものです。ご本人から、上司や同僚から、様々な研修機会、本などの情報、日々の生活の中から、いろいろ学ぶ機会があります。たゆまぬ努力をします。そして力を有効に発揮していきます。

5. 私は、謙虚さを大事にします。独りよがりにならず、素直に学びます。また謙虚さと感謝は比例します。職員・利用者・家族・地域など多くの方々に支えられて今の私が存在することを忘れません。

支援者は謙虚でなければなりません。というよりも、よい支援者ほど謙虚になっていきます。自分の無力さを知るからです。自分のわずかな知識や体験ではとても十分な支援ができないことを身にしみて感じます。だからこそ素直に学びます。また、自分がいかに無力で、周りの方々にいかに支えられているかを自覚するので、自然と感謝の念が湧いてきます。

6. 私は、相手をかけがえのない存在として考えます。かけがえのないとは、唯一無二ということです。「その人らしさ」を尊重し魅力を引き出すよう支援します。

この世に私という存在は 1 人しかいませんし、相手という存在も 1 人しかいません。唯一無二の存在同士の間がかりが生み出す一瞬のきらめきを大切にします。では「その人らしさ」とは何か。それは私たちが「自分らしさとは何か」と考えたときと同じく、難しい問題です。「人や社会とのつながりの中で、周囲からひとりひとりに与えられる立場や尊敬の念、共感、思いやり、信頼を意味する」と定義する人もいます(トム・キットウッド)。個性という固定的なものがあるのではなく、関係の中で生まれてきます。そういう意味では支援者である私たちも当事者です。利用者との関係の中で、その人らしさは何か考え一緒に創りあげていくものです。支援者である私たちの想像力や感性が試されます。

7. 私は、信頼される人になります。信じて頼りにされることです。頼りにされるには、相手に寄り添っていこうとする思いや責任感の強さと、それを実現する力が重要です。利用者や同僚、関わる全ての人から頼りにされる存在となります。

信頼関係の元になるのは思いの強さと責任感です。ただそれは、一朝一夕に築かれるものではなく、時間を守る。約束を守る、言葉使いや態度といった「小さなこと」の積み重ねによって醸成されていくものです。そして壊れるときは一瞬に壊れてしまいます。「信頼関係があるから、これくらいしても大丈夫」という人もいますが、誤りです。信頼は 相手から寄せてもらうものであり、信頼を維持してもらうために、キチンとした節度ある対応をしていかなければなりません。

8. 私は、連携を大切にします。自分ひとりでできることは限られています。支援にかかわるチームの一員として、目的を共有し、自分の役割を全うするとともに、関係者への報告・連絡・相談を怠りません。

解説する必要もないほど基本的なことですが、実は抜けてしまいがちです。一般に「報連相が大事」と繰り返されるのも、抜けることが多いからです。特に身近な人に抜けてしま

うことがありますので気をつけましょう。また連携は「give and take」といいますが、主観的には「give and give and give」ぐらいで、やっと相手は「give」してもらったと受け取ってもらえます。まず与えましょう。

9. 私は、福祉にとって人財はとても大切だと考えます。自ら学ぶとともに、後輩に積極的にかかわっていきます。理念や人生について深く考え、技術や情報を広く収集し、他者に伝えることを通して共に成長していきます。

人は組織にとって最も大事な要素です。特に対人支援の福祉の現場ではとても重要です。自分より経験の浅い人、知識技術の少ない人には進んで経験を伝え技術を教えましょう。それが自分自身の成長になります。また専門性の土台になるのが人間性です。人はどのようにあるべきか、人の幸せとは何か、人生について知見を広め、自分で深く考え、人間としての幅を広げることが大事です。

10. 私は、礼儀をわきまえた行動をします。礼儀とは相手を大切に思う気持ちを場面や状況に応じて適切に表現することです。自分から元気で明るいあいさつをし、言葉づかみや態度、服装などその時と場合に配慮します。

礼儀とは、四角四面の作法ではありません。また特別なことでもありません。常に相手のことを大切に思いTPOに合わせて振る舞うことです。そしてそれは権利擁護にもつながることでもあります。相手がどう感じるかを考えれば、視線・声の調子・話すスピード、身振り手振り等の問題は自ら答えが出ます。

11. 私は、職場の問題を自分のものとして受けとめます。よい支援を提供するにはどうしたらよいのか、働きやすい環境を整えるにはどうしたらよいのか、改善を他人任せにするのではなく、よく調べよく考えて、積極的に企画提案します。

「くれない族」という言葉が昔流行りました。「彼が〇〇してくれない」「彼女が××してくれない」とよく言う人、そういう思いの強い人のことです。問題点に気づくことはよいことです。しかし問題を他人のせいばかりにして改善に取り組まなければ何事も進みません。ましてや自分たちの働く環境は自分たちで改善していかなければ変わりません。具体的にどうしたらよくなるのか、独りよがりな意見ではなく、状況をよく考え、企画提案していきましょう。すぐに改善できることは多くないでしょう。しかし取り組み続けることが、職場の改善にもなりますし、自分の成長にもなります。

12. 私は、食はいのちの原点ととらえ、共に食べる大切さと楽しさをいつも考えます。一緒に食べることで親近感や安らぎを得ることができます。会話を楽しみ、ゆったりと豊かな時間を過ごしながら、しっかりと食べていただくよう工夫します。

食は人間にとって基本的なものです。「いのち」をいただき「いのち」を育むものです。食は、栄養・健康・コミュニケーション・教育・文化・家庭内の役割等々、様々な側面があります。食のあり方を考え、適切な支援(共食と個別対応とのバランス、食形態の工夫、季節感、環境整備等)をしていきます。好き嫌い、お代りなど支援者個人の価値観を強制するものであってはなりません。かといって本人の希望という名の支援の放棄であってもなりません。個々人の状況ごとに、どのような食が望ましいのか、本人や家族・支援者等で話し合い対応していきます。

13. 私は、無駄遣いを慎み、ものをいかしきります。資源は有限であり、共通の財産です。お金を払えば自分の自由にしてよいというではありません。地球環境も視野にいれ、節約できるところは節約し、大切に活用します。

今使っているお金や物はどこから来たのでしょうか。利用者の方や家族の自己負担はもちろん、介護保険などの皆さんが出しあった掛け金、税金。そして多くの方々の善意のご寄付。無駄に使ってしまったては申し訳ありません。資源も有限です。それは本当に必要なものですか。よく考えて大切に使いましょう。とはいっても、食卓を飾る花、記念日のちょっと豪華な食事、おしゃれな服。「無駄」なことかもしれませんが、そのちょっとした贅沢が、生活に彩や潤いを与えます。利用者のためなら湯水のごとく使ってもよいということではありませんし、緊縮一辺倒でもありません。知恵と工夫で資源を効果的にいかしきりましょう。

14. 私は、社会的規範、法令やルールを正しく理解し遵守します。他人がみていないからよい、知らなければよいではなく、不正・不道德な言動は自分自身がみて聞いて知っています。「三方よし」の考えに立って、誠実さを大切にします。

ルールを守ることは、当たり前のことです。しかし当たり前ができないこともあるのが人間の弱さ。本来しなければならぬことができなかつたり、してはいけないことをしてしまったときは、理由を並べて「仕方がない」と正当化してしまいがちです。自分にしか分からない時は特にそうかもしれません。しかし自分はそのことを知っています。自分の心に恥じない言動が求められます。三方よしとは「売り手よし、買い手よし、世間よし」。ごまかして自分の立場を守るのではなく、自分にも、相手にも、それ以外の人にもよいことはないかという視野に立って、誠実な生き方をしましょう。